



戸^{なまがら}を 高きへ 運び 新樹の 夜
 なけなしの 狂気の 火種 大夕焼
 蛇の 眼を 潰し 雉子の 雛を 呼ぶ
 猪牙舟の つもり 紫陽花 奥へ 奥へ
 カヤックの 白髪に 夏来り けり
 来し 方の 錨の ごとし 書を 曝す
 夏木 立無 辺の 空を まさぐれり
 卯の 花腐し 土一 塊に 宿る もの
 目を 凝らし 見えくる 星や 摘果 とき
 瀧行は 炎の 中 いる ごとし
 水無 月や 鉄砲 水の 被爆 川
 納棺の 母に 十粒の 草 苺
 初恋を 忘れぬ やうに 袋掛
 柿若葉は ればれと 物捨てて をり
 灰汁 抜きし 蕨 微かな 鉄を 帯ぶ
 織部 黒ゆがみ 五月の ひようげ もの

小林 貴子
堤 保徳
有手 勉
満田 光生
関 千賀子
小宮山 秀子
木幡 テイ
橋本 幸篤
柳澤 和子
倉科 繁登
小谷 一夫
山口 章子
岩間 嘉一
真弓 ぼたん
五味 澄子
藤森 泰子

*

切株を 起こすに 根気 夕郭 公
 木の 根明く 誰か 誰かに 敗けて いる
 螢の 夜謎を ふかむる ダーク マター
 ミッテ ランの 恋文 読めば 明易き
 天道 虫翅 拡ぐれば 恋の 字に
 梅雨 寒や 目の 白くなる 泣く 童
 越路 字植 田集 落灯を 落とす
 夕方 の土の 匂へる 栗^つ花^い落^りかな
 沸騰し 深化し 五月 森は 海
 友逝つてしまへり 刈草の には ぶ
 ふる 里の 皐月 仕舞や 笹 団子
 望郷の 春の きりんの 長 睫毛
 蛇の 死を 弔ふ 草の 声きこゆ
 ぬかりなく 蠶 螂の子は 蠶 螂に

樋上 照男
小熊 里利
渡辺 秀雄
古畑 恒雄
村田 朋美
曦 達久
米山 節子
梶原 夢乃
田中 利政
上村 敦子
岡本 京子
愛甲 敬子
柁木 幸子
諏訪坂 恵子

岳俳句・拓くことば 八月

(436)

宮坂 静生

はじめに。今月はじめての投句者が十人ほど。このころ「岳」への入会者がふえ、うれしいことだ。心して選句している。新人ばかりでなく、旧新人にも十分気を使って。

尸を高きへ運びとは

尸を 高きへ運び 新樹の夜 小林 貴子

通夜の間を思い描いた。尸を一段高き処に据えた。外は新緑がおうばかりの夜。残酷といえは生と死のあざやかな対比があるが、それも自然。感情を交えないで淡々と句の骨組みだけが描かれている。古典的ともいえる儼かな句を好む作者らしい一句。

なけなしの 狂気の火種 大夕焼 堤 保徳

詩人にとって狂気は味方。常凡の思いでは頭一つ抜け出す俳句は書けない。「人を恋ふる歌」(与謝野鉄幹)は「六分の俠気四分の熱」であったが、満州浪人氣風の「俠気」(男だて・おとこぎ)はもうはやらない。大夕焼をながめながら、自分の中にはちよっぴりでも狂気に通う才能があるのかなと自問している作。世に俳人たらむとする者、この思いは十分

夏木立無辺の空をまさぐれり 木幡 テイ

南相馬在住の作者。どうということもない句であるが、木立にしても大空にとび交うストロンチウム、セシウムなどが気になっている様子。当然、それは作者の見方、意識の問題であろうが、「無辺の空」からそんな思いが伝わる。

卯の花腐し土一塊に宿るもの 橋本 幸篤

空木の花、卯の花を腐らせるという梅雨の前の長雨。土はどんな芽を出させ、水分をどのように貯えるものか。人は見える世界はわかっても、土一塊だけでも内側の様子はわかっていない。地味な着眼であるが、土一塊へ思いを寄せたとこ

今月の秀句

猪牙舟のつもり紫陽花奥へ奥へ 満田 光生

浅草待乳山聖天さんへの吟行、囁目句なので、状況を知らないとわからないであろう。猪牙舟は二挺櫓の小船。むかし新吉原へ遊船のため山谷堀(荒川治水)を行き来した。紫陽花公園のたくさんの紫陽花を分けて進む。あたかも吉原通いの猪牙舟に乗ったつもりだという。蕪村研究者の光生さんらしい着想の作。期待の若手といわれ、回生の句になるか。

に理解されよう。(あゝそれなのに)家にはいつの時代でも、決して理解を示さない山の神が居られることになっている。

蛇の眼を潰し 雉子の雛を呼ぶ 有手 勉

親の雉子の強さを描き、どこか諺風の句だ。自然界の蛇と雉子との生存競争の場を見せつけられた感じ。能登の鄙育ちの力づよさが句材にも滲む。こういう句から新しみを探り出すのであろう。熱意とアイディア抜群の作者。

カヤツクの白髪に夏来りけり 関 千賀子

本来はエスキモー(イヌイット)の木の枠に毛皮を張った小舟。近年は河や湖沼で遊船を楽しむ折に用いられる。乗り手が白髪とは格調がある。往年、研究者でもあったものか。夏のスポーツも時代とともに変ってきた。句材豊富な作者。

来し方の錨のごとし書を曝す 小宮山 秀子

曝書の一冊一冊に時々思い出がある。手を止めて見る。「錨」の比喩に知情がこもる。故人への思いが深い。書物でないと亡き人との思いは繋がらない。書物は宝。

ろ、宗教心を思わせる。表現の妙である。

目を凝らし見える星や摘果どき 柳澤 和子

林檎の摘果どき。しっかりと実になりそうな幼い果実を選ぶ作業が五月の終りから梅雨どきにかかる。暮れ遅い夕方まで、星を探しながら。安曇野の林檎農家詠。

瀧行は炎の中にあるごとし 倉科 繁登

熱中すれば火中に居ると同じ。大胆な飛躍したい方は諺に近いが、只の観念操作から生まれた句ではない。実感が伝わる。古来、行者の修行は水中を火と見、火中を水と見るものであったか。心構えの一句と読む。

水無月や鉄砲水の被爆川 小谷 一夫

梅雨末期から梅雨明けにかけて、列島の全国各地に被害をもたらしている。水がない水無の月であるにもかかわらず、このところの気候変動は、集中豪雨(鉄砲水)をもたらす。長崎の原爆被害の川が鉄砲水とは、人災と天災との違いはあが、きびしさは変わらない。正面から立ち向った堂々の作。

納棺の母に十粒の草莓 山口 章子

つゝましい。子どもの頃の母と子の思い出か。母を送るやり方は千差万別でも、純一な思いは同じ。素朴さこそ。

拓くじつば ③ 自句寸言(15)「樺立つ火」

溺るるか六月罐に棒立つ火 昭和49年

「鷹」(昭和四十九年八月号)、九州坊津での作。「上人と泡吹き虫の消えし岬」が同時作。この年四月に信州大学教養部に採用され、六月には同大学医療技術短期大学部講師に就任。同月、湯布院で「鷹」の吟行会に参加後、長崎から薩摩半島の尖端坊津へ行く。枕崎から耳なし峠を越え、梅崎春生「幻化」の舞台に来たことで興奮した。坊泊小学校がかつての一乗院跡地。掲句は泊浦の真夏の焚火詠。東シナ海に臨み、鑑真和上上陸の秋目浦も近い。夜、大雷雨に遇う。湾が破裂するようだった。

『山開』所収。

夏終る不意に叩いて櫂の木 昭和49年

「鷹」十周年が昭和四十九年九月二十二日、帝國ホテル牡丹・孔雀の間で開催。その折の湘子特選句。イメーヅには母の実家南安曇郡堀金村の屋敷を囲む櫂の原木があった。高校教師から学者の道への転身が意識にあった。「やらねば」という気持。十月「夢の像―藤田湘子論」(「鷹」十周年記念号)「鷹」評論賞受賞。『山開』所収。

夜は水に日の匂ひして鳳仙花 昭和50年

「鷹」(昭和五十年十一月号)同人作品。母が乳癌の手術をした年。「母に血を与ふ眩しき白露の日」五句が印象にある。掲句は夜、台所の水道の栓を開けた。ふとカルキに交じりお日さまの匂いがした。寿台は乾燥地の高台で、玄関口まで鳳仙花が溢れていた。『山開』所収。

墨の香や栗鼠の聴耳すずしとも 昭和51年

「鷹」(昭和五十一年九月号)「東明雅先生より端溪硯を贈らる」とある。この年七月、助教授昇任祝いに頂戴した。栗鼠が葡萄に戯れる彫りが裏面にある精巧なもの。掌に乗る小型がうれしい。信州大学では教養部近世文学講座を一コマ担当。医療技術短期大学部では文学、コミュニケーション論を教えた。東先生の推輓、加藤慶二先生にお世話になった。『山開』所収。

水中を真水のいそぐ合歡の花 昭和52年

「鷹」(昭和五十二年九月号)。大学は研究と講義と校務文書業務がある。学生との交流が好きで、進んで雑務を引き受けた。掲句は本業の学問の世界への意識を詠んだもの。研究室には毎日深夜まで詰めて、死生学の論文精読と、上原三川を中心に子規門日本派の形成状況の調査を開始した。見事な合歡の木の花期が長かった。『山開』所収。

初恋を忘れぬやうに袋掛 岩間 嘉一

私の〈戦争にとられぬやうに袋掛〉をもじり、「初恋」と冠せたもの。大切な初恋。だれにも盗まれないように。桃の実はまことに初恋が熟して立派な秋口の実となる。藤村の詠んだ林檎も同じ。嘉一さんらしい純情さがいい。

柿若葉はればれと物捨ててをり 真弓ぼたん

熊本震災に遇った作者だけに、この機会に身辺をぐっと簡素にする決意がついたものか。「柿若葉」の土俗的な季語がよく効いている。伝来のものもとうさっぱりした思い。

灰汁抜きし蕨微かな鉄を帯ぶ 五味 澄子

灰汁抜きをした蕨の鉄色は太い針金のごとし。こんなことも表現しておきたい。見逃せばそれきりのこと。平凡な日常でわずかに光る些事を見留め聞き止めるのが俳句の楽しさだ。

織部黒ゆがみ五月のひょうげもの 藤森 泰子

「剽物」はおもしろいものの意。茶道のことは一切わからないが、美濃の古陶、古田織部好みの陶器。織部茶碗の代表、織部黒のデフォルメされた形のゆがみを讚え、初夏五月の季節感にびったりだという。東京国立博物館蔵の織部黒の写真をしげしげと見つめる。茶碗の微妙さはこの上ない。

同人作品から推薦候補作を掲げる。

宇宙への夢を育みキャベツ抱き	唐澤南海子
啖呵切る力身に欲し新樹の夜	西牧千恵子
施無畏図の菩薩なやまし六月来	中溝 玲子
掠めたる鳥影迅し梅雨穂草	塩川 昭子
木の根明く誰か誰かに敗けてゐる	小熊 里利

木の根周りが明く雪解け頃の自意識を分析したもの。人間も冬眠中の自分からいよいよ活動期を迎える。あの人には勝ちたい。当面関心を持ち生き甲斐にしていることに關して。表情にあらわにしないで、気持の上では勝ち負けのバランスを取りながら暮らしている。ドーナツ状に明いた木の根を見て、ふと内面の氣にしていることへ転じたのが巧み。

螢の夜謎をふかむるダークマター 渡辺 秀雄

不思議な句だ。銀河系宇宙には光を放っていないのでわからないが〈暗黒物質〉と呼ばれる巨大な物質があるという。螢の飛び交う夜、螢とはまったく異なるが、夜空に巨大な暗黒物質を想像するという。そんな物質が不意に地球に衝突したらどうなるのか、想像もつかない恐ろしいことだ。人工頭脳が話題の世の中、この類の句がふえるのではないか。

ミッテランの恋文読めば明易き 古畑 恒雄

私は未読なのでくわしくはわからない。フランス大統領として尊敬されていたミッテランに三十二年間も愛し合っていた女性アンヌ・パンジョがいた。その娘マザリン（オルセーの学芸員）が大統領から母への恋文を出版した。愛は困難なときほど燃えるという趣旨らしい。掲句は純愛の主。夢中に読み終ったら短夜は忽ち明けていたという次第。世界にはいろいろな大統領がいる。が、本妻ともども大統領の葬儀にも出たらしい愛人の生き方がいかにもフランスか。一句のさりげなさが大人の作といえよう。

天道虫翅 掘ぐれば恋の字に 村田 朋美

丸型の天道虫が飛び発つときの形が「恋」という字だという。一つのロマンティックな着想がリアルな着眼に基づいているのが巧み。俳句の在り方とはこううものなのであろう。目のつけどころは写実的。一句の詩想は物語が拡がる抒情詩。経験ゆたかな本誌新同人である。

梅雨寒や目の白くなる泣く童 磯 達久

泣きじゃくると童は白目になるという。妙なところを見ているが、これも紛れもなく一句。季語への配慮もよい。

越路字植田集落灯を落とす 米山 節子

米どころ越後、向う三軒の小集落。字名が「植田」と一句を読んだのだが、よろしいか。あまりにも米一本槍の地名の

つか暮しのリズムそのものと化し、いよいよ本格的な夏を迎える目安になっていたものか。地貌とは風土として一般化できない笹団子の味のような素材さがある。越後の新進。

望郷の春のきりんの長睫毛 愛甲 敬子

日本に移入されたきりんが春の日永に故郷南方の国を茫洋と思った。「長睫毛」に、人間ならば、やるせなさに睫毛の先端に涙をためているさまが想像されよう。きりんが無表情なのがいつそう哀しい。「望郷」とは戦後、シベリア抑留者の思いでもあったが、動物園舎のきりんの身上に転移したのがよい。

今月の秀句

切株を起こすに根気夕郭公 樋上 照男

句集『丸太小屋』を出し好評の著者。丸太小屋を建てる山林中の整地詠か。大木を伐採、その切株を掘り起こす作業のたいへんなことが詠まれる。高原とはいえ、夕方の郭公の声を背景に根気くらべ。来る日も来る日も、自分にどれだけの執心、根気があるか。はじめて出会った体験であろう。原始人には日常であったものが、長い人類史の果にこんな形で蘇ったのがおもしろい。句集『丸太小屋』のその賜物。

付け方の芸のなさに、かえって感心した。田が無事植わり、一安心と植田集落の夜が更ける。質素この上ない作。

夕方の土の匂へる栗花落かな 梶原 夢乃

梅雨入を北村季吟が「紅梅千句」で「梅の美なるまじなひや月の暮」（政信）に付けて「墜栗の雨を請てかへるさ」（季吟）とした。こゝから「墜栗花」と当て字が出たもの。丁度、栗の花が落ちる時期だという。夢乃さんの原句「夕が曳く」を「夕方」と添削。梅雨入の当て字も含め、季節感がある。

沸騰し深化し五月森は海 田中 利政

新緑湧き立つ森を「海」と見立て、「沸騰」「深化」と垂直的な思考のことばを重ね、躍動する森の大きさを描く。よく考えて森を構造的に捉えたもの。詩のような一句であるが、一読楽しくなる。隠喩の効果が出た作である。

友逝つてしまへり刈草のほふ 上村 敦子

畦草刈の後に佇ち、亡き友をふと思った。いまだ慰ぶというほど内省的にはなっていない。友の魂がはまだ刈草の辺に遊弋している感じ。働さざかりの友なのであろう。

ふる里の皐月仕舞や笹団子 岡本 京子

旧五月尽（皐月仕舞）に笹団子をつくる。越後らしい。い

蛇の死を弔ふ草の声きこゆ 柗木 幸子

原句は「綿雲や蛇を弔ふ草の声」であった。「綿雲」（片積雲）が要るかどうか。私は、草たちが蛇の死を悼んでいる声がかさむらから聞こえるというイメージを描く。さまざま草の声を表わすには「きこゆ」がほしい。草とて蛇への思いはいろいろあるのではないかと思う。アニミズムの世界。

ぬかりなく蟻螂の子は蟻螂に 諏訪坂恵子

「ぬかりなく」からうようよと誕生したばかりのかまきりの群が見えるようだ。ちゃんと親の小型、こしゃくな体をしている。こおろぎではだめ、かまきりの句材がよい。

おわりに。

当然のことながら、岳集投句用紙は本誌貼付のものを用いる。原稿用紙などで別に作らない。選句都合上、冊子にする上で統一されたものでないと不便。誌友紹介は用紙裏に記してよいが、会計ほかのことは事務局宛別便でお願いをしたい。近況報告などは適宜、本誌のやまびこ欄へ転載させていただくことがある。

もう一つ、句の差し換えはご遠慮願いたい。前月と重複しないようにノートに記録してから投句されたたい。